

小田原市文化振興ビジョン策定検討委員会 第3回会議概要

1 日 時：平成23年10月26日（水） 15：00～17：00

2 場 所：清閑亭

3 出席者

(1) 委員（10名）

石塚委員長、間瀬副委員長、鬼木委員、杉崎委員、露木委員、平井委員、
岩城委員、大森委員、神馬委員、山口委員
（欠席：桧森委員）

(2) 行政（6名）

諸星文化部長、座間文化政策課長、古矢文化芸術担当課長、杉本文化政策係長、
福井主査、瀬戸主任

4 傍聴者：2名

5 概 要（議事）

(1) ビジョンの骨子案について

【石塚委員長】

- ・これまでの2回の会議での議論を踏まえて、事務局でまとめたビジョンの骨子案を基に進めていきたい。ビジョンの構成も含めて、意見をいただきたい。

（ビジョンの骨子案について古矢文化芸術担当課長より概要説明）

【石塚委員長】

- ・桧森委員が作成された「小田原市文化振興ビジョン仮説」と骨子とのつながりは、どのように考えているか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・桧森委員の仮説は、主に「Ⅲ これからを見据えた方針、取り組み」の「3. まちの魅力のみがく」の部分に該当する。
- ・小田原の特色を出すためには、都市ブランドの構築は重要だが、文化振興ビジョンとしては、行政面での取組だけでなく市民の活動や心を変えていくというところまで盛り込んでいきたいと考えている。
- ・第1回会議で岩城委員が発言されていた、文化による暮らしぶりの変化といったものも含めて、桧森委員の仮説を基に「1. 風土の知恵を生かす」「2. 市民の熱意を育む」「3. まちの魅力のみがく」の三本立てとさせていただいた。

【石塚委員長】

- ・間瀬副委員長の考えはどうか。

【間瀬副委員長】

- ・骨子とすることで形になってきた。これから先、何年かの方向性を決めるものなので、具体的なことを書くのは難しい。
- ・心豊かに暮らすというのは最終的な結果であり、それらをいくつか挙げて集約していくことで、大きな方針が見えてくる。全て一緒にすると混乱するので、大きく3つくらいに分けると良い。
- ・骨子は今までに出た様々な意見を並べたものという感じがする。例えば「3つの柱」とか「5つの施策」というようにまとめて、それぞれについて具体的に議論し、はっきりとしたビジョンにしていきたい。
- ・昨日、逗子市の文化振興基本計画策定等検討委員会が開催された。文化振興基本計画とは、文化振興条例を基に策定した具体的な5年間のアクションプランだが、文化について議論をしても、最終的にはまとまらないという結論に達した。ある程度は皆の意見が散りばめられたものであっても良い。

【石塚委員長】

- ・一人ずつ、順に意見を伺いたい。

【山口委員】

- ・「Ⅱ 1. 恵まれた文化資産」について。かつて存在していた歴史都市としての小田原の独自性が、最近では忘れられつつある。東京や箱根に近いことは、交流人口の呼び込みという点ではプラスだと思うが、逆に、東京に近いせいで小田原独自のものが希薄化し、そのことが小田原の後進性と捉えられているのではないだろうか。交流人口を増やす一方で、小田原の独自性を守るためには、東京方面と一定の距離を置く必要もあるのではないか。
- ・「Ⅱ 2. 解決しなければならない課題」の「知り、編集し、発信していく」ことは、現場レベルでは難しいと感じる。広報力の強化は、個々の事業単位ではなく組織化して推進していくべき。情報の編集・発信は、桧森委員の仮説でも重要な位置付けとなっており、同感である。
- ・「Ⅲ 1. 風土の知恵を生かす」は、一般的に行われていることであり、自身の仕事でも普段から実践しているが、いわゆる「お国自慢」ではいけない。単に「この人が偉い」というだけでなく、「なぜ偉いのか」という理由が説明できなくてはならない。二宮尊徳の評価は概ね確立されているが、北村透谷に関しては、島崎藤村と並ぶ近代文学者と言われているものの、評価の面ではさらに検証が必要である。
- ・「Ⅲ 1. (3) まちの記憶を伝える」を実践するためには、資料の収集・保管だけでなく、聞き取りも重視したい。今生きている人から過去の小田原の暮らしや景観を

聞き取るという作業が必要であることを明記すべき。

- ・「Ⅲ 2. 市民の熱意を育む」の「(2) 市民の文化活動を支援する」は、行政が関わる部分だが、行政職員としての立場で考えると非常に難しい。文化・観光・教育などの各所管が関わってくることだが、方法としては、ばらばらに対応する、相互に連携する、新しい組織を作る、の3つがある。自身の経験上、連携してもあまり効果はないので、総合的な対応をとるのであれば、新たな組織づくりが必要となるだろう。
- ・「Ⅲ 2. (3) 活動の環境を整える」では、市民ホールを整備するだけでなく、既存施設の有効活用や民間施設との連携も考えてほしい。市民ホールの整備を入れるのであれば、既存施設も整備すべき。市民ホールだけに偏っているきらいがある。
- ・「Ⅲ 2. (4) 文化の担い手を育てる」の実践にあたっては、行政内部に専門的人材を置く必要がある。自ら考え、行動できる職員がいないと行政面での対応は不可能。
- ・「Ⅲ 3. まちの魅力をみがく」の「(1) 小田原の景観を守る」という表現は、保守的すぎないか。現在の小田原の景観は、古いものと新しいものが混ざって形成されており、その中に生活文化が染み込んでいる。ただ守るだけでなく、「整備する」という積極的な表現とすべき。

【平井委員】

- ・誰がやるのか、誰にとってのビジョンなのかを明確にし、委員間で共有する必要がある。市役所なのか、市民なのか、両方を含めた市全体なのか曖昧になっている。
- ・課題解決型のビジョンとするならば、「Ⅲ これからを見据えた方針、取り組み」は個々の課題に沿った形式にしたほうが分かりやすい。
- ・「Ⅱ 1. 恵まれた文化資源」を最初に入れるというのは、これまでどの計画でも書かれてきた形式。むしろ「文化の危機的状況」についても記述し、小田原だけの話ではなく、東日本大震災や不況などの社会的背景を考えて、今ビジョンを策定しなくてはならない理由を明確にする。
- ・今、日本全体のキーワードとなるのは「絆」。第二次世界大戦中に亡命死したシモーヌ・ヴェイユの著書名でもある「根を持つこと」も、ヨーロッパ再興のキーワードとされた点で参考になる。なぜこの時代に文化をやらなくてはいけないのかを示すことで、市民に共有してもらえるのではないか。
- ・「文化を振興すると、このような良いことがある」として、一方的に文化を何かのために使うのではなく、「文化を振興することにより文化自体も守られていく」という、好循環の発想を入れたい。例えば、経済活動に文化を利用する際には、経済が豊かになることで文化財の維持保存が図られるとする、収益の還元という考え方がある。
- ・「Ⅱ 2. 解決しなければならない課題」として挙げるには、データなど具体的に現

状が認識できるものがないと理解できない。委員として携わっている小田原市地域経済振興戦略ビジョン策定委員会でも、データに基づき問題点を提示したうえで検討を進めている。文化面での数値化は難しいかもしれないが、言葉だけが先走ってしまい、後で齟齬や期待外れが生じないような工夫が必要。

【石塚委員長】

- ・会社経営においても、将来構想に対する現状分析を行い、何が問題で、何をしたら良いかという順序で整理している。骨子の組み立て方は分かりづらいと感じる。

【露木委員】

- ・文化は人々の生活から生み出されていくもの。連携できる部分はあるとしても、全てを一つにまとめることはできないので、個々に動いていくしかない。
- ・「知り、編集し、発信していくこと」ができていないのが現状。山口委員が指摘されたとおり、この部分は個々の活動では難しいので、行政が新しい機関を作り、まとめて発信してもらえればと思う。
- ・作品を飾るだけでは、人は興味を持たない。箱根ラリック美術館で開催した企画展も、作家とプロデューサーと発信機関が揃ったからこそ成功したのだと思う。

【杉崎委員】

- ・小田原にあるのは、海の幸、山の幸、川の幸、里の幸、人の幸。これらの幸を求めていくことが文化であり、また、そこから何かが生まれ、循環していくことも文化である。
- ・「Ⅱ 1. 恵まれた文化資源」という表現には疑問を感じる。恵まれていないものや失われたものもあわせて示すことで、市民に現状を分かってもらえるのではないだろうか。ビジョンは行政だけのものではなく、市民に知ってもらえるもの。悪い面も含めて現状をきちんと知らせることから始め、そこから具体的にこうしていきたいということにつなげていけると良い。
- ・人それぞれに考え方は異なるので、求めているものを一本化することはできない。様々な生活がある中で、一人ひとりが喜びを求めていけるようなビジョンにできると良い。

【神馬委員】

- ・文化といってもいろいろなものがあるので、初めに「文化とはこういうもの」と示しておく必要がある。
- ・課題に関しては、裏付けが欲しい。課題から解決への流れを作り、分かりやすい構成としたい。
- ・「Ⅲ 2. (4) 文化の担い手を育てる」の部分は、育成のための人材として、文化面での専門職が必要ではないか。
- ・「Ⅲ 3. (3) 小田原を発信していく」について、発信するためにはどこかに情報を

集める必要があるが、骨子では誰がどうやって発信するかが不明確。発信者の育成と、発信のための仕組みづくりが必要。

【石塚委員長】

・骨子には課題として「地域特性を生かしきれず」とあるが、地域特性についてはどのように考えるか。

【神馬委員】

・地域特性が何かということも、人によって異なるのではないだろうか。

【石塚委員長】

・事務局としてはどのようなことを考えているのか。

【古矢文化芸術担当課長】

・例えば、北条氏は他の戦国大名と比べると知名度が低い。観光地であれば、もっと観光客が来ても良いのでは。寄木細工も素晴らしい技術なので、もっと売れるのではないかと思う。

【石塚委員長】

・他と比較して小田原の優れた点を活かしていきれていないということか。

【古矢文化芸術担当課長】

・小田原は地域資産の宝庫とも言われるが、全国的に見れば知名度は低い。

【石塚委員長】

・この部分について共通認識としたうえで進めていきたい。

【杉崎委員】

・例えば寄木細工というブランドを、小田原が全国に対して発信していないという理解で良いか。

【石塚委員長】

・寄木細工はたいへん歴史ある文化であり、このアドバンテージを伸ばすことにより地域経済に貢献できるというような整理をしていくことが、ビジョンの具体化なのではないか。

【鬼木委員】

・「Ⅰ 文化の力で未来を拓く」について。文化振興の目的をはっきりさせるべき。最も大きいものは、異なる価値観を認め合うことであり、これによりまちの基本が培われていくのだと考える。単にまちの再生だけを目的とするなら、経済振興でも対応できるが、文化振興によるまちの再生には、文化でどのように市民の力を培っていくかが大きく関わってくる。全ての人に文化芸術に触れる機会を与えることや文化芸術活動の環境を整えることにもつながってくるので、文化振興の目的については手厚く書いていきたい。

・「Ⅱ 小田原を取りまく現状」について。「2. 解決しなければならない課題」の考え

方だが、目指す将来像があり、それと現状とを比較して生じた差が課題なのではないか。逆に、将来像がない中で課題は何かと考えても方向性は見えてこない。まずは目指す姿を明確にしたうえで議論すべき。

- ・「Ⅲ これからを見据えた方針、取り組み」について。方針と取組が一緒になってしまっている。方針とは将来像、言い換えればビジョンそのものであり、取組とはそれを実現するために行うもの。この2つは、同じ章に入れても良いが、議論としては別のものだと思う。
- ・最初に間瀬副委員長がおっしゃった大まかな方針として、私は次の3つにまとめてみた。一つ目は「小田原まちのリニューアル」として、清閑亭周辺のような個性あるエリアや新旧文化人の滞在場所のアピールと、小田原駅から小田原城へのルートづくり等を盛り込む。二つ目は「小田原クリエイティブ」として、ものづくり、食文化、観光など産業・経済分野でのクリエイティブ性の発揮。三つ目は「小田原コミュニティ」として、市民自治の形成という意味での人と人とのつながりづくり。これらを「3つのビジョン」とし、それに対する課題を出していくとイメージしやすいのではないか。

【石塚委員長】

- ・今挙げていただいたものは、これまでの議論に出てきた「都市ブランド」と同義か。

【鬼木委員】

- ・この3つが都市ブランドの構成要素となっていくと考える。

【大森委員】

- ・文化は、大きく分けると芸術分野と生活分野に分かれることは明示しておきたい。今まで何気なく関わってきたものも文化であることに気付いてもらう必要がある。
- ・11月に開催する「おだわら環境志民フォーラム」に、無尽蔵プロジェクト・環境（エコ）シティのメンバーとして関わっている。東日本大震災を契機に、便利であることが幸せだと錯覚してきた反省を踏まえて自然環境との共生を考えるものだが、そこで「命と便利は、どちらが大事ですか」をサブタイトルとするよう提案した。便利が優先される社会が、今日の様々な心のひずみを生んでいるのではないか。今は、心のありようが問われている時代である。
- ・文化には大きく分けて2つの意味がある。一つは人の心を満たし、つなげることであり、もう一つは利益をもたらす、観光や経済に資すること。これらは両立する部分もしない部分もあるが、この2つの意味を混在させてはならない。
- ・文化が持つ意味のうち、私は人の心の部分に重点を置きたい。幸せとは何かを考えたとき、私達は、お金があることや便利なことが幸せだと考え、道を間違えてしまったのではないだろうか。ビジョンではそういった部分にもきちんと触れ、小田原のまちを「小田原の文化を背景に、心の満足感を得られるまち」としたい。

- ・ビジョンの構成としては、目標、課題、取組、推進組織とする。最初の目標は、明確なものとするべき。次に課題となるが、私自身は、小田原は文化体制では恵まれておらず、マイナスからの出発と認識している。三つ目の取組については、できる限り具体的に、2つでも3つでも「これは絶対にやります」ということを書き、5年後、10年後、15年後、20年後といった時間軸での目標設定も盛り込みたい。最後の推進組織には、情熱と実力のある指導者が必要。肩書きや全体のバランスで集められた10人よりも、そのような人が1人いるほうが強いので、人物にこだわりを持ってほしい。

【岩城委員】

- ・前回の会議で桧森委員がおっしゃっていた、プロの活動拠点づくり、若手の育成、市民一人ひとりの文化の底上げといったことを目標にしていけば、魅力的なまち、豊かなまちが実現するのではないか。
- ・9月23日に開催された「北条五代シンポジウム」で、北条五代をNHKの大河ドラマ化したいという意見があった。これが実現し、全国規模で展開されれば市民はフィーバーすると思うが、現実的に考えると難しいかもしれない。
- ・山橋市長の時代に「歴史と文化の香るまち」というキャッチコピーがあり、なるほどと思ってまちの散策や研究をしたものだが、市民一人ひとりの文化の底上げのためには、市民全体に受け入れられるような、よりインパクトのあるものが必要ではないか。
- ・今、キャッチコピーづくりに最も効果的なものは市民ホール。例えば「絆ホール」「北条五代ホール」「栄枯盛衰ホール」というように先に命名してしまうことにより市民が「何だろう」と思い、どこに建てようとしているのか、どのような人が関わっているのか、自分も参加できるのかと関心を持っていくことが、文化の底上げにつながっていくと思う。
- ・骨子には具体的な要素がなく、つかみどころがないと感じる。また、骨子に対する市長からの意見に「東日本大震災以降の時代性の中で、小田原の文化をどう位置付けるかを具体的に言及しないといけない」とあったが、これに関しては、小田原や日本だけでなく全世界に普遍のものとして、文化とは郷土愛、家族愛をベースに育っていくものだと考える。小田原への郷土愛とは、小田原を離れたとしても小田原に戻ってきたい、小田原のものを食べたいと思えることではないだろうか。
- ・10年後、20年後の小田原の文化は、市民が長い間待ち望んでいた市民ホールが成功するか否かにかかっている。市民ホールがあらゆる文化の発信地になっていくであろうことを、完成までの間に市民に知らせていくことが重要である。

【間瀬副委員長】

- ・東日本大震災で被災した岩手県内のホールにヒアリングをした。私が直接伺ったの

は、8月まで避難所となっていた大船渡市民文化会館と2階まで浸水して使用不能となった釜石市民文化会館の2館だが、他の人がヒアリングした分も合わせると、現場のリーダーにより対応が全く異なると感じた。そこから学んだのは、文化を扱う人づくりと、その人材を自治体や市民がプロとしてうまく活用していく関係の重要性である。

- ・逗子市の文化振興基本計画策定等検討委員会でも、文化振興とは何だろうということを中心に考えているが、私は、最終的には人づくりとまちづくりであると思う。
- ・骨子は目的と具体的な方法が混在していて分かりづらい。市長からのご意見では時系列とするようにとのことだが、時系列で具体的な方法を示すのは、より政策的なアクションプランに任せないと、ビジョン自体が膨大なものになってしまう。ビジョンは理念と、それを分かりやすくするためのいくつかの具体例のみとしたほうが良い。

【石塚委員長】

- ・これまでの議論の中で問題提起されてきたことの中から、基本的な部分について検討したい。
- ・まず、旧市街地と川東地区との関係と、ビジョンを考える上での地理的な範囲として、小田原市のみで良いのか、箱根等の近隣市町村も含めるかという問題。
- ・次に、総合計画とビジョンとの関係。
- ・また、市民ホールとビジョンとの関係。
- ・最後に、誰のために、何の目的でビジョンを策定するのか。ビジョンにおいて目標とするまちの将来構想とは、どのようなものか。
- ・これらについて、委員の皆さんの認識を統一したい。

【杉崎委員】

- ・以前、城内に住んでいたときはイベントが多いと感じていた。今は蓮正寺に住んでいるが、地域の人はいったものには無関心である。情報がなく、終わってからイベントがあったことを知るような状態だし、行ったところで駐車場がないので車が停められないという声もある。最近は改善されつつあるのかもしれないが、中心市街地と外の地区とのつながりは希薄だと感じる。
- ・「歴史と文化の香るまち」を提唱していた山橋市長の時代には、いろいろな立場の人がまちづくりのために自らお金を集めて様々なことをしていたが、20年経ち、昔の良いものが消えてしまっている。新しく作るのではなく、昔あったものに付け加えていくという考え方はできないだろうか。以前に市民会館について議論していた人達が、「言っても仕方がない」とあきらめ、今は全く携わっていないのが勿体ない。このような人達を再度集め、その意見を活かさないだろうか。

【平井委員】

- ・文化は自然や歴史を背景とすることから、文化の圏域は、かつての小田原藩か酒匂川・早川流域圏のいずれかとなるのではないか。
- ・同一市内でも多様なライフスタイルがあり、産業構造も異なり、各所で新たな価値の創造が起こっている。旧市街地と川東地区との区別については、それほど考慮する必要はないと思う。

【山口委員】

- ・中心市街地エリアは歴史的にも一つの文化圏ということができるが、そこを一步出ると様々な文化圏が混在しており、それらを一つにまとめるとなると、一気に2市8町のエリアまで広がってしまう。そもそも、文化を既存の行政区画に当てはめられるか否かは、議論の余地がある。

【神馬委員】

- ・なりわい文化という観点では、皆さんの意見のとおりだと思う。しかし、芸術文化に関して、ビジョンを活かし、何かを創っていくという観点では、市民の税金は等しく使われていくのだから、居住地に関係なく、全ての小田原市民のためのものとしなければならない。
- ・何のために策定するかについては、幸せに生きるため。文化に関することなので、他のものとは違い、夢を持たせるような温かい表現を。

【鬼木委員】

- ・市の文化振興ビジョンなので、市域を対象とすべき。
- ・横浜市は川崎市を都市間競争のライバルとしているとも言える。都市間競争とは、自治体が個性を発揮するために他の自治体との違いを主張すること。周辺の自治体との連携も考えられるが、住民が自ら首長と議会を選び税金を使うという自治の原則からすれば、自治体の住民に利益があるから連携するのだということになる。

【平井委員】

- ・小田原市の都市間競争の相手となるのは平塚市や厚木市と思われるが、いずれも文化圏としては異なる地域である。
- ・小田原市の文化施設は、小田原市民の税金で建てているが、他市町村の皆さんにも使っていただけるものである。逆に、小田原市民が南足柄市や秦野市の施設を使うこともある。文化振興につなげていくのであれば、市域に限定せず、文化圏という考え方も可能である。

【鬼木委員】

- ・小田原が2市8町の中でリーダーシップをとり、文化圏をリードしていくという考え方はあると思う。

【杉崎委員】

- ・小田原が将来的に発展するためには、人口を増やす必要がある。人口が増えるのは

住みよいまちであり、これにより税収もホールの利用も増やすことができる。

【鬼木委員】

- ・人口を増やすのであれば、保育所や老人ホームの整備が必要。
- ・横浜市が都市間競争において力を入れているのは企業誘致だが、そこに文化の要素を加えることで都市ブランドの向上を図っている。

【石塚委員長】

- ・文化は経済的裏付けがないと発展しない。人口が減ると市の財政も厳しくなり、文化どころではなくなってしまう。小田原が経済的に豊かになるという目標がないと、ビジョンは絵に描いた餅となってしまう。

【杉崎委員】

- ・なりわいという言葉には商人の世界、大阪や名古屋のイメージがある。小田原に関しては、住むことに重点をおくべき。葉山に出かけた際に感じたような、心豊かでのんびりした、人の気持ちが受け取れるまちであってほしい。

【石塚委員長】

- ・食や観光については主に旧市街地、教育や生活については市全体が対象となるのではないか。
- ・次に、総合計画とビジョンとの関係についてはどう考えるか。

【間瀬副委員長】

- ・総合計画を理解したうえでビジョンの議論をしていますよ、という程度で良いのでは。ビジョンに関わるのは、総合計画の体系図のうち「歴史・文化」に属する「20 歴史資産の保存と活用」から「23 生涯スポーツの振興」までの4項目だが、この項目をそのまま使うと最終的には同じものになってしまい、文化振興ビジョンにはならない。この項目を使うのであれば、総合計画に基づいて文化振興施策に取り組んでいることを説明するために、各項目に関連する具体例を挙げる程度が良い。

【石塚委員長】

- ・本委員会独自のビジョンとして整理し、市長に示すということか。

【間瀬副委員長】

- ・総合計画は無視しないように。

【石塚委員長】

- ・事務局はそれで良いか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・総合計画に書かれている文化芸術の範囲は狭いが、実際には経済・福祉・環境などまち全体に関わっている。必ずしも総合計画の構成と同じでなくてはいけないわけではない。

【石塚委員長】

・誰のためにビジョンを策定するかという点はどうか。これは大事なこと。

【古矢文化芸術担当課長】

・小田原市民のためのビジョンであることは明確。桧森委員や市長からは、誰がやるのかという主語を明確にするようご意見をいただいている。

【石塚委員長】

・市民の代表者、行政の責任者として、市長を主語とするということか。

【間瀬副委員長】

・行政、市民の両方ではないか。行政にとっても市民にとっても、ビジョンは後押ししてくれるものであると同時に、足枷にもなりうるものである。行政と市民の両方に目を向けていく必要がある。

【石塚委員長】

・ビジョン策定の目的はどうするか。これは明確にしておく必要がある。鬼木委員の挙げられた3つの柱をたたき台とするか。

【鬼木委員】

・平井委員のおっしゃった、循環を生み出すという発想も良い。一方的に何かのために活用するとなると、役に立たないものは切り捨てることになる。本来、文化芸術とは何の役にも立たない可能性があるもの。文化を振興した結果として、経済活動や人と人とのつながりに役立つこともあるという捉え方をしておかないと、役に立つものばかりが重宝され、最終的には文化芸術活動を萎縮させてしまう危険がある。文化振興の目的としては、循環することに焦点を置きたい。

【石塚委員長】

・文化を育むことで、結果として社会や経済が活性化していくという側面も入れていきたい。

【平井委員】

・社会・経済が活性化しなければ文化も衰退し、さらに社会・経済も停滞する。悪循環か好循環かのいずれかであり、好循環としていくことが大事。

・社会的・経済的にある程度自立した地域もあれば、そうでない地域もある。大儲けできなくても、そこそこの暮らしで良いという考え方もある。経済的達成感をどこに置くかで、将来構想も変わってくる。

・地方では、その土地で暮らしていることに誇りや希望が持てないということがよくある。小田原で暮らし、小田原で活動することに誇りを持てると良い。

・都市部に見られる価値観の衝突が、将来的には小田原でも大きな課題になると思う。鬼木委員の「異なる価値観の共有」というのは、魅力的な概念である。

・自立性、誇り、価値観の共有を将来構想の柱としたい。

【石塚委員長】

- ・自立することは重要である。日本人の劣化は、何でも人に頼ること、お上（かみ）に頼むこと、要求型の人間になっていることに起因する。国の財政が危機的状況となっている今、自治体にも家族にも企業にも自立が求められている。他を頼らずに自立して生きていくための準備をしっかりとしている者が、最後に幸せになるのだと思う。

【神馬委員】

- ・人により満足度は異なると思うが、行き過ぎは望んでいない。小田原では、人口が増えすぎても良いことはないのではないかと。バランスをどう盛り込むかが難しいところだが、節度も求められると思う。

【石塚委員長】

- ・大森委員のおっしゃる心の問題になる。競争が激しくなると人の心が荒み、病んでしまい、そこから悪循環が始まる。適度なゆとりは必要。

【神馬委員】

- ・狂気により生まれる文化もあるので、一概には言えないが。

【杉崎委員】

- ・人口を増やすというよりは、減らさないようにすることが目的。これからの時代、人口は放っておけば減ってしまうので、20万都市を維持できるよう、小田原を住みやすいまちにするということ。

【石塚委員長】

- ・人口を維持するためには、女性の労働力が必要。行政が子どもを預かる施設を充実させ、待機児童をゼロにしていくような施策があれば、それもインセンティブとなる。そのようなことも盛り込んでいけると良い。

【大森委員】

- ・幸せとは何かという部分にこだわりたい。人により様々な定義があると思うが、私は、「たとえ何かが不足していたとしても、今のままで満足だと言える状態」だと考える。そのように感じる場所を小田原のあちこちに作りたいし、また、文化活動を通して感じられるようにしていきたい。

【杉崎委員】

- ・小田原の文化レベルを維持するためには、プロが生活できる基盤が必要。素人でも形だけであれば良いという意識が強ければ、プロは存在できなくなってしまう。プロを活かせる仕組みづくりが、都心から離れたまちとしての課題である。

【大森委員】

- ・市民ホールとビジョンとの関係について、皆さんはどのように考えているのだろうか。ホールの運営組織とビジョンの推進組織は、同一とするのか個別に設けるのかについても意見を伺いたい。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・市民ホールについては別途検討しているが、運営組織に関しては、別のものとして考えていただきたい。小田原の文化政策は、ホールでの文化芸術活動だけではない。

【間瀬副委員長】

- ・組織としては、別のものにしないといけない。ビジョンの推進組織は、先程の文化圏の話題で出てきたようなエリア全体を意識して議論する場。一方で、ホールの運営組織は、アウトリーチ等の例外はあるものの、基本的にはホール内でのアクションを中心に考えることとなる。対象エリアはビジョンのほうが広く、その一部をホールが担うということである。

【石塚委員長】

- ・これらの関係については、厚生文教常任委員会でも同様の議論となっている。ビジョンはホール整備も含めた大きなものであり、組織は別という整理としたい。
- ・最後に、最も大切な部分である、小田原の都市ブランドとは何か、どのようなまちを目指すのかについて考えたい。

【鬼木委員】

- ・私の考える都市ブランドは、先程申し上げたとおり。

【間瀬副委員長】

- ・杉崎委員から出された、プロが活動できるまちについて私の考えをお話したい。
- ・プロが住むまち、プロにギャラを払えるまちとなるためには、市民の文化度を上げていくしかない。プロが仕事できる場と同時に、市民が対価を払って観ようとする意欲が必要である。
- ・ホールにピアノを置く際、プロを呼ぶためにスタインウェイ社製のものを選ぶことが非常に多い。日本的発想だとは思いますが、国産のピアノでは世界の一流のピアニストは来ないという考えである。プロが仕事をするための場をきちんと用意することにより市民が本物の芸術を鑑賞できるようになるので、その器を整える必要はあるが、ホールさえできればそれで良いというわけではない。享受する側の市民が必要ないと言え、プロはお金になる横浜や東京へ行ってしまう。
- ・市民の文化度の向上は、ビジョンというよりは、ホールができることがきっかけとなり、可能性が広がると考えている。

【石塚委員長】

- ・会議の予定としては、あと一回でまとめることとなっているが、まだ議論は残っているので、もう一回追加したいと考えている。

(委員・事務局了承)

【古矢文化芸術担当課長】

- ・次回の開催が11月なので、第5回会議を12月に開催できるよう別途日程調整を

させていただく。

(委員了承)

【石塚委員長】

- ・ 目指す方向性が固まれば、そこから課題が抽出でき、その対策としての取組も整理できる。次回はそこまで整理したうえで議論をし、まとめるという段取りとしたい。

(第4回会議の日時・場所について確認)

【石塚委員長】

- ・ 以上をもって第3回会議を終了する。